



清華大学で講演をする筆者

## 中国招聘講演

### 『第三回

### 中日高齢化社会政策と

### 産業化シンポジウム』にて

池田 智子（日本保健医療大学保健医療学部長・教授）



シンポジウム  
プログラム表紙

主催：清華大学科学技術・社会研究センター

協力者：日中科学技術文化センター、北京大学医学部医

養結合養老研究センター、清華健康科学基金、

清華大学日本研究センター

後援：清華大学薬学院、江西廬山温泉養老センター

開催日：2018年5月18日至5月19日

場所：清華大学 蒙民偉楼多目的ホール

はじめに

今回招聘を受けて訪中した筆者以外の日本人講演者は、政産官学各界の第一人者ばかり、中国側講演者も然りであり、そのような方々の御講演を拝聴できた筆者自身とても勉強させて頂く貴重な機会になった。錚々たる面々の中になぜ筆者が入っていたのか、それは幸手市の取り組みが注目されたためであった。

## 1. 大会主旨

大会の主旨は次のように記されていた（日本語訳文）。「本大会は、中国と日本の高齢化社会の現状と動向や、社会保健システムと養老サービス体系の設立における経験と問題に対し、中日両国の産官学の交流の場をつくることを目的とする。お互いに経験を分かち合い、情報を交換し、協力を促進する。

中国における急速な高齢化に直面し、習近平主席の『新時代の養老と健康産業に対する新要求』を着実にするために、我々は『養老、孝老、敬老』という政策体系と社会環境を真剣に築き上げ、高齢化産業の発展を推進しなければならぬ。本大会の注目する議題は以下の三点に

ある。

第一、医養結合を特色とするサービス体系の建設  
第二、知恵養老、AIとインターネットを代表とする  
科学技術養老

第三、大健康と養老産業チェーンの発展

大会ではお互いに経験を分かち合うことを望んでいる。特に日本の成功したやり方などを学び、中日両国の健康養老政策の制定と産業連携を推進し、中国の養老産業が健康的、持続的、安定的に発展していくことを促進したい。」

## 2. 内容

(1) 初日（5月18日）

大会冒頭に飯田博文氏（日本国駐中国大使館公使）や、巨東英氏（日中科学技術文化センター理事長）、王維民氏（北京大学医学部副主任兼北京大学医学教育研究所所长）、張秋俛氏（清華大学戦略研究員専門家指導委員会主任）らの挨拶があり、開幕した。

続いて基調講演に入り、中国からまず追暉氏（住宅・都市農村建設部総経済士）より高齢化社会における都市

部と農村部の格差問題が指摘され、続いて呉明氏（北京大学医学部主任助理、北京大学公共衛生学院博士指導教官、社会医学・事業管理係主任）より長期介護保険政策への展望について述べられた。

続いて日本から最初に登壇されたのは、愛知和男氏（日本介護事業連合会会長、元衆議院議員）であり、「日本に於ける介護政策の基本哲学」を説明されたので紹介する。つまり「日本では、介護予防の最大の課題は生活習慣病にならないこと、と強調されているのが最近の特徴である。老いに伴う虚弱化の問題に対しては怪我防止のインフラ整備なども重要である。一方ひとたび介護が必要になった場合は、日本の長い歴史では、身内のものが世話をする」という考え方であったが、実際は容易でない。そこで出てきた考え方が「地域でお世話する」という「地域包括ケア」である。大規模施設に要介護者を収容するのではなく、小規模な施設を地域にまんべんなく配置すると同時に、訪問・在宅医療を充実させる方向で国の施策が進んでいる。医師の役割も、従来の来院患者を診ることから、患者の住居を訪問し人生そのものに寄り添う「かかりつけ医」に重点をシフトするように変化

が起きている。これからの介護のあるべき姿を実現するには、ハード面に留まらず、従来の考え方の転換など多くの困難を乗り越えて行かねばならない。」と、外国の方々にはとても分かり易い明快な説明であった。

清華大学内にある近春園賓館という素晴らしいホテル内のレストランにおける昼食会をへさみ、午後は日本と中国の先進的取り組みや研究事例が8題紹介された。中国は「医養結合に対する分析研究」「養老に対する系統性分析」「高齢者介護における法的思考」「55歳年齢層の精神衛生状況」「認知老化の基礎研究から応用への思考」とバラエティに富む大変興味深い内容であった。

日本からは川渕孝一氏（東京医科歯科大学教授）より「高齢者介護問題の解決策を探る」と題して、ヘルスケアを核にしたまちづくり（地域包括ケア）の必要性の根拠や方法などが解説された。続く五十嵐歩氏（東京大学大学院医学系研究科講師）は「日本における高齢化対策…地域包括ケアシステム構築の取り組み―地域高齢者支援におけるコンビニエンスストアとの協働―」と題して、コンビニ店員の高齢者対応スキルアップや、ケアプランへのコンビニ活用などユニークな取り組みが紹介され

た。一方来栖宏二氏（アゼリリーグループ理事長、日本自立支援介護・パワリーハ学会理事）は、高齢者の自立支援により社会参加を促進することで活動性を維持し、医療・介護予防を推進するという実践例が紹介された。

(2) 2日目（5月19日）午前

劉兵氏（清華大学社会科学学院科学技術所教授）の司会により、村田吉隆氏（日中科学技術文化センター会長、元内閣府特命担当大臣、元衆議院議員）の挨拶で開幕した。

最初に登壇されたのは黒川清氏（日本医療政策機構代表理事、東京大学名誉教授、元日本学術会議会長、元カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）教授）であった<sup>9</sup>。Ageing Japan-For Healthy Ageing Society（主題）、認知症がもたらす世界各国でのインパクトを衝撃的に示され、未来に向けて活動する世界認知症審議会での御活動や、日本における認知症官民連携プラットフォームを構築された経緯と、そこでのハイレベルステークホルダー会合の様子や、内閣官房にプロジェクト報告書を提出されたことなど、政策に直結する実効ある実践を、認知

症研究のエビデンスやグローバルな視点に基づいて行っておられる様子がよく分かり、大変勉強になった。

次の登壇者は蔡毅氏（日中介護学会副会長、北京市老齡産業協会顧問・駐日総代表）で「日本の経験を学び、中国の養老産業の発展の道を探る」のテーマでお話くださった。この先生は以前、本学に来学くださり直接対談をさせて頂く機会があった。全文を雑誌に掲載しているので参照されたい<sup>10</sup>。日本の現場を多く視察され真摯に勉強されていらっしゃる。また日中両国の法制度問題も熟知され、前掲別紙の対談においても「両国の保健医療系学生が意見交換や研修できる場が求められる」のテーマについて現実的な示唆を得た。今後日中両国の橋渡し役として大変重要な先生である。

続いて橋本智己氏（埼玉工業大学教授）と郭世傑氏（河北工業大学教授）から「コミュニケーションロボットの感情モデルとエピソード記憶」「養老ロボット開発と応用における国内外の現状」、謝紅氏（北京大学医学部護理学院副教授）から「インターネットに基づく高齢者介護システムの開発と実践」の御発表があり、中国のAIやインターネット分野の高度な発展の様子を知ることができた。

※ 池田智子、蔡毅…近未来に向けた大学の挑戦 対

談1 中国と日本、保健医療の近未来 『世論時報』  
平成29年12月号、9～11頁、2017

(3) 2日目（5月19日）午後

午後は「高齢化と健康に対する中国国家評価」「日本の介護保険制度の変遷と現状」「日本における介護保険制度と高齢者住宅マーケット」「超高齢化社会に対応した金融サービスの向上に向けて」というように制度や経済関連の講演と、教育体制や効果評価に関する講演があった。

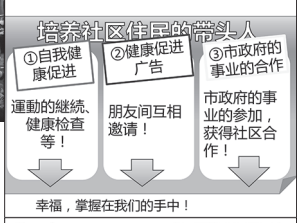
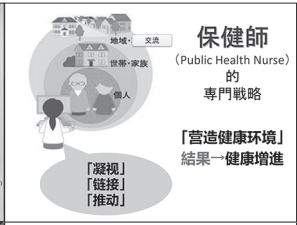
続くセッションでは「コミュニティ在宅養老保障システムへの思考」というテーマで展開され、李強氏（清華大学高齢者研究センター主任教授）の「多レベルの養老サービスシステムの建設について」の他、「子どもと高齢者が共に過ごす『共生型施設』の今後の可能性」「長期寝たきり患者に対する介護技法」「日本の養老施設における自立支援の理念と応用」などがあり、この一部において筆者も講演した。

### 3. 筆者の講演内容

「地域共同発展型社会に向けて動き出した日本の保健医療福祉一体化政策」と題して講演した（講演スライドを23頁に添付）。内容は以下のとおりである。

短命時代は長寿こそが幸せだったが、長寿が当然の世の中になると、必ずしも長寿が幸せといえないようになってしまった。そのような中、我が国の政策は、縦割り公的支援から丸ごとの地域づくりへと転換した。医療モデルから生活モデルへの転換ともいえる。

そもそも人は「健康のために」生きているのだろうか？決してそうではなく、人は「幸せや夢のために」生きているのであり、それを達成するための「資源」として健康に努めているのではないだろうか？それなら皆で助け合い、健康的な環境をつくり、誰もが知らず知らず当たり前に健康にいられ、安心してそれぞれの夢に向かって生きていける世の中にする、それが理想といえよう。とヘルスプロモーションの理念をマンガで説明し、それを市民が実際に成し遂げている幸手市の事例を紹介した。そこには種々の仕掛けづくりが必要であり、それを行うのが「保健師」という専門職であると、中国には無い



平成28年度の成果

- ・腹囲 平均 2.9 cm減少
- ・体重 平均 0.7 kg減少
- ・善玉胆固醇 (HDL-C) 増加
- ・悪玉胆固醇 (LDL-C) 減少
- ・下肢筋力 向上
- ・平衡感覚 向上
- ・心理健康度 向上
- ・医療費 0.9%減少



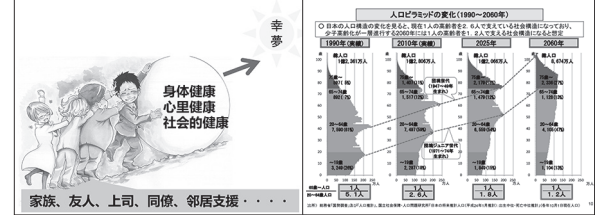
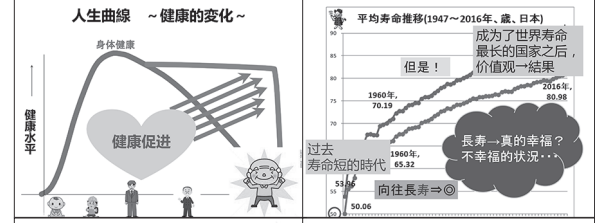
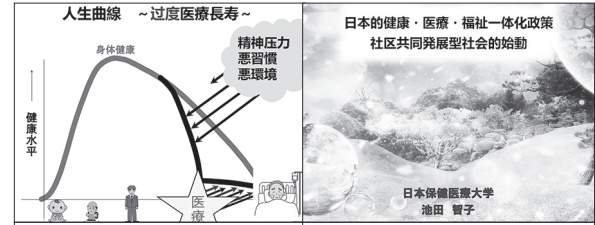
**日本の“终活”文化**  
 活着时安排身后事，就是让自己在活着的时候选一个定有“尊严死”的行为。日本高龄者普遍是坦然面对。中国高龄者？他们会在身体还健康时，积极安排好各种身后事：  
 拍一张满意的遗像，选一款喜欢的骨灰盒，挑一块心仪的墓地，将离世后的遗物提前整理妥当……这一系列统称为“终活”。如今，这在日本已成风潮，受到越来越老年人的认可。

筆者の講演スライド (続き)

問題、子育て問題」と二者対立的意識(他人ごとの意識)を乗り越え、他世代にも理解と思いやりを持つ心を育むことである。そのため幸手市高齢者の自主的活動を若者世代にも聞いてもらおう機会をつくってみたいところ、会場には高校生200名を含む多様な世代が

600名も集まった。最後に皆で歌を歌ったところ、大きな声で力強く応援し合う光景が見られ、世代を超えて一体感が得られたひとときとなった。以上のような活動の蓄積により、多世代をも「丸ごと我が事」ととらえる市民意識が少しずつ広がり、地域の「助け合い」の風土は、時間をかけてつくられていくものであると思われた。

**4. 清華大学**  
 本シンポジウムの主催者および会場となった清華大学について簡単に説明を加える。大都会北京市の中心地に405ヘクタール(東京ドーム87個分)もの広大



「不一定努力 不知不觉 自然 为了健康 梦想迈向一个安心生活的社会」理想  
 道路宽阔而平坦 = 安心、安全、健康的环境



筆者の講演スライド

職業の重要性を説明した。保健師は健康の知識を単に個別に指導・教育するのではなく、市民が自ら気づき、計画を立て、実行して行けるようにエンパワメントし、困難時は過不足無く援助してファシリテイトする。地域を「個人」「家族」「集団」の各単位でよく「見て」「つなぎ」動

「かす」ことがその専門性であるが、重要点は、保健師が先頭に立って旗を振るのではなく、市民の伴走者になる姿勢である。さらに今後の地域づくりに重要なのは、人々の間に旧態然と残る「高齢者(介護問題)」対「若者(勤労

なエリアを占めるのが清華大学である。ちなみに隣には北京大学がほぼ同規模の面積を占めていた。学生寮や教職員住宅は構内にあると聞きそれは便利と思いきや、学生寮は35棟、教職員住宅は100棟以上と多摩ニュータウンの3倍にスーパーマーケットも数か所点在し、広過ぎて回りきれなかった。同構内の校舎へは車で平均20分、30分ぐらいかかるという。病院は当然、美術館、コンサートホール、映画館、博物館、ホテルまで完備していた。そしてこの構内は、広大なだけではなかった。米経済誌「フォーブス」が公表した「最も美しい大学キャンパスランキング」で選ばれた世界14校の中で唯一アジアからランクインしている大学なのだ。「キャンパス内の建築物はバラエティに富み、歴史的な背景を有し、清華園の景色は散文のような美しさ」と称えられている。さらに大学前には「清華科技园」というハイテク工業団地が、大学キャンパスとは別に69万平方メートルにわたって広がり、清華大学の産学連携の高層ビル群が、日本の丸の内のように立ち並ぶ様子も圧巻であった。

しかし広大さや美しさより増して有名なのは、清華大学の超名門ぶりである。「2019年世界大学ランキン

そして東アジアのライバル大学に目を移すと、中国の清華大学22位（前年より8つランクアップ）、シンガポール国立大学が23位、中国の北京大学は31位、香港大学は36位と、日本を引き離して躍進しているのが現状だ。中でも中国の大学がアジア首位に立ち、最も牽引しているのが清華大学であった。さらに清華大学は、研究分野では世界6位にランクし、これはプリンストン大学、イエール大学、マサチューセッツ工科大学を超える順位となっていた。世界ランキング編集ディレクターのフィル・ペティ氏による中国成功の秘訣は、国際的な見通しと国際的パートナーシップの強化、教育機関への継続的な多額の投資、そして世界最高の人材を引き付けることに重点を置いていることにある、とのことだ。

清華大学は世界と提携した産業開発も活発に行っており、中国政府のブレイントラストの役割を担っているとも評されていた。校訓は「自強不息、厚德載物（自らを向上させることを怠らず、人徳を高く保ち、物事を成し遂げる）」だそうである。また学生による合唱団、舞踊、曲芸、美術など11の芸術団体もあり、4071平方メートルの「学生文化活動中心」というホールで活動してい

グ」を見てみる。まずはわが国に目を向けると、東京大学は昨年より順位を4つ上げて42位、京都大学は9つランクアップで65位と安倍首相も喜んでおられるそう。



清華大学裏門にて



清華大学キャンパス内



清華大学学長室前

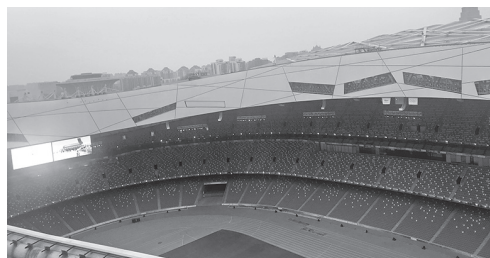
た。体育館「総合体育中心」は12600平方メートル、プール「遊泳館」は9400平方メートルだそう。また学費は年8万円、学生寮は年2万4000円とのことであった。

## 5. 名所旧跡巡り

主催者の案内で名所旧跡を少し巡ったので、写真を数枚紹介する。



鳥巢国家体育場（北京五輪会場）概観



鳥巢国家体育場（北京五輪会場）屋上から競技場内を望む



万里の長城



明十三陵

## 6. 北京旅行の感想

北京旅行の感想を一言で表すと「とにかく巨大・壮観」であった。到着した北京首都国際空港からして、エアポートエクスプレスまで実によく歩いた。アジア最大級、世界第二の規模というだけある。そして市内移動の際いつも感じたことは、空気がきれいだったことだ。日本のメディアでは、工場や自動車の排気ガスによる北京市の空気汚染が有名だったので、目前のきれいな光景には正直驚いた。中国は法改正が柔軟であり、工場移動命令や自動車走行規制が出されたため、急激に改善したとのことであった。急な移転や規制は多くの人を困らせただろうし、根本的解決になっていないとも思われるが、とにかく北京の空気はきれいになっていた。

また一時期日本では、中国人観光客のマナーの悪さが注目されたが、空港や観光地では、ゆずり合いなどのマナー向上を呼びかけるボランティアの人たちが多く見られ、中国が「真の大国」へ脱皮を図っている姿を垣間見たような気がした。2017年で満65歳以上人口が1億5831万人と実数ランキングでは世界一位（総人口の11.4%）とはいえ、日本（同27.7%）と比べれば、

圧倒的に若者の姿が多く、活気があった。清華大学内は、世界各国からの優秀な学生が、意気揚々伸び伸びと元気に活動していた。

名所旧跡を訪れ、またモンゴルに続くシルクロードを走行した際には、悠久の歴史に思いを馳せる気持ちに浸れた。北京城や、天安門広場、最高人民法院（最高裁）などが建ち並ぶ官庁街でも歴史文化保護区として開発規制が行われており、当時の豪華絢爛さや伝統的な町並みがそのまま美しく残っており、労働者を鼓舞し発展や革命を摩天楼で表現した時代背景などが思い起こされた。

一方キャッシュレスシステムや、どこでも乗り降り自由なレンタサイクルなど、アプリを使用した便利な機能が市内にあふれており、どんなに小さな個人店や、郊外地方にも浸透するほど普及しており、日本をはるかに超える便利さであった。

このような貴重な機会を与えてくださった清華大学および関係団体と、出張させていただいた日本保健医療大学に心より感謝申し上げます。



紫禁城

裏表紙の裏

白紙のページ